

企業名：北興化学工業株式会社

レポート名：HOKKO レポート 2022

### 1. この会社が目指す姿が理解できるか

トップメッセージおよび経営計画の章で、長期経営計画「HOKKO Value Up Plan 2030」の説明がなされており、2030年に向けた方針が詳しく確認できた。特に、1st stage と称された2025年までの計画については、基本方針に加えて具体的な経営目標が示されており、2021年には各目標の進歩や達成がみられたことも分かった。方針に対しては、2021年度の取り組み実績と、2022年度に予定されている取り組みが箇条書きにまとめられているが、やや具体性や実現可能性に欠けるものも複数見られた。SDGs についてのページもあったが、通常の業務内容をあてはめたもので、強く力を入れているようには感じられなかった。また、具体的な取り組みによってどのような会社を目指すのか、という少し抽象化された話題に乏しく、長期的にみた将来像（雰囲気のようなもの）は想像しにくかった。もっと強気に、会社を大きく強くしていこうという姿勢を見せてもよいと思う。

### 2. この会社の競争優位性が理解できるか

北興の主要3事業についての説明がなされていたが、同業他社と比べてどうかという内容は書かれていなかった。最重要事業であろう農薬事業に関しては、農薬の大切さとその開発の難しさが述べられたうえで、2014年と2021年に有用な農薬製品を開発したことが理解でき、農薬開発の分野において実力を有していることが想像できた。ファインケミカル事業については、農薬開発の経験を活かした技術（グリニャール反応）が北興の武器であることが分かり、海外を含めた幅広いニーズにこたえていることが確認できた。また、複数の研究所や試験農場を国内外に所有していることも分かった。一方、やはり製品販売の市場に占める割合や事業規模を示すデータなどは記載がなく、具体的にどれだけ競争を優位に進めているのかが判断できなかった。加えて、繊維資材事業に関しては特筆すべき武器や優位性が理解できなかった。

コーポレート・ガバナンスやレスポンシブル・ケアといった、主に企業内のマネジメントについてはある程度の分量の記載があったが、北興の特別な強みがあるようには感じられなかった。

### 3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

北興の有する技術が失われるということは考えにくいですが、他社に追いつかれ追い抜かれるという可能性はあるように思える。また、北興の競争優位性が本レポートにおいてあまり強く押し出されていないため、その持続性についても判断しきれない。社内マネジメントや顧

客・投資家とのコミュニケーションなどについては、強みが分からないと上で述べたものの、逆に弱点もあまり見受けられないので、企業の持続性に寄与する部分はあると考えられる。

#### 4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

あまり思えない。本レポートの「人材育成」と題された部分を見ても、気になるのは「階層別研修」くらいで、特有のスキルアップ制度は見受けられない。コンプライアンスやリスクマネジメント、クレーム対応や農業・化学、環境といったものに関する意識・能力の成長は見込めるかもしれないが、自身の価値向上を目指す場としては、北興化学工業である必要性は感じられない。

#### 5. 報告書にはどのような改善余地があるか

繰り返しになるが、会社の将来像はもっと強気に想定して提示してよいと思う。また、「北興化学工業」がないとダメなんだと思わせるよう、アドバンテージについてはより強調すべきだし、グリニャール反応の技術を持つ会社が他にどれだけあるのか、北興の市場占有率はどれほどか、という他社と比較したデータが必要である。その際は競争優位性の持続性についても記載してほしい。

人材育成については、具体的な施策や制度の詳細を載せたり、可能であれば、社員の紹介や社員からの声を記載したり、人材の成長を示すデータがあるとよい。

経営の現状と目標を除いて、全体的に、強調された具体例やデータが少ないと感じた。